

フランス・ルネサンスの想像界 (IV)

——ピエール・ド・レトワルの『日記』を読む——

伊 藤 進

II 天の徴

1 地上から上天へ

怪物とは「自然の歩みから逸脱して現れたもの」⁽¹⁾であった。つまりこの珍しさ、稀少が私たちに怪物を注目させるのである。そのうえ怪物は「将来何か悪いことが起こる徴」⁽²⁾であった。つまりつねに何か他のものを表徴する記号なのである。これは怪物の語源からして首肯しうる。フランス語の怪物 «monstre» はラテン語の «monstrum» を語源とするが、後者は「見せる、警告する」を意味する «monere» からの派生語であった。このことから «monstrum» は神々の意志を知らせる驚異とか解読されるべき神の徴を意味する宗教用語であった。これがのちには例外的な性格をもつもの、超自然的な存在に当てられるようになったのである。したがってフランス語でも «monstre» の本来的な意味は「驚異、奇蹟」の意であった⁽³⁾。「怪物」は、それゆえ、過去の過ちや来るべき災厄の徴であると同時に、異常や驚異や奇蹟でもあるわけだ。こうして単なる否定的な意味ばかりでなく、神に生気を吹き込まれた自然の多様性とダイナミズムの徴にもなりえたのである。怪物の二面性である。

(1) A. Paré, *Des monstres et prodiges*, op. cit., p. 3.

(2) *Ibid.*

(3) *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la dir. de A. Rey, Paris, Dictionnaires Le Robert, 1992, p. 1267, s. v. Monstre.

ところで、用語的には怪物も驚異も奇蹟も同意語なのだ。アウグスティヌスが、神の意志に従って「しるし」《monstra》とか「目じるし」《ostenta》とか「前兆」《portenta》とか「予示」《prodigia》と呼ばれている多くの奇蹟が生じる、と述べているように⁽⁴⁾、いずれも神の意志を表すことなのである。だから、彗星のような自然現象も、死者の蘇りのような超自然的な出来事も、シャム双生児のような畸形も、悪夢のような心的現象も、みな同じ記号なのである。ということはつまり、賛嘆すべきものであり畏怖すべきものであった。ラブレールが『第四之書』第27章で、「この大地や地上の人間どもが、かくのごとき傑出した靈魂とともに居を定め、これと付き合い、これより恩恵を受けるのに相応しからぬということを明示するために、天空は、一切の自然の秩序に反して作られた奇蹟、異変、怪物、その他の前兆によって、大地を驚愕せしめ畏怖せしめるものだ」⁽⁵⁾とパンタグリユエルに言わしめて、奇蹟、異変、怪物、一切の自然の秩序に反して作られたその他の前兆（《prodiges, portentes, monstres, et aultres precedens signes formez contre tout ordre de nature》）を区別もなく並べ、こうした列挙を受けてエピステモンが「異変」《prodiges》というたった一語にひっくるめて要約したのも、驚異に厳密な境界がないからである。つまり、怪物も奇蹟なども他の驚異と同様に、神の意志を表す記号にはかならなかった。ならば私たちに差し向けられた教えを内包するこれらの驚異を収集し、解釈せねばならない。さまざまな現象を解読して、それに固有の意味を貼りつけるにしても、ある人は将来の出来事の予知を読み取るだろうし、ある人はむしろ自己に立ち帰ることへの誘いや悔悛への

(4) アウグスティヌス『神の国』(五)、前掲書、292頁。

(5) Rabelais, *Œuvres complètes*, éd. M. Huchon, avec la collaboration de F. Moreau, Paris, Gallimard, Bibl. de la Pléiade, 1994, p. 602 (ラブレール『第四之書パンタグリユエル物語』、渡辺一夫訳、岩波文庫、1974、154頁)。Cf. par ex. M. Hansen, «La figure du monstre dans le Pantagruel», *RHR*, N° 24, 1987, pp. 25-45; M. Jeanneret, «Rabelais, les monstres et l'interprétation des signes (*Quart Livre* 18-42)», in R. C. La Charité (ed.), *Writing the Renaissance. Essays on Sixteenth-Century French Literature in Honor of Floyd Gray*, Lexington (Kentucky), French Forum, Publishers, 1992, pp. 65-76.

呼びかけを認めるだろう。怪物・畸形を見ることには嫌悪のいりまじった関心を引き起こすものだが、天に視線を上げるのは、神の顕現が目にも鮮やかに映るので、むしろ喜びの気持ちに浸ることができるかもしれない。16世紀人は地上から上天にも視線を向け、神のメッセージを読もうと固唾を呑んで注視するのである。

とはいえ、常ならぬ空の現象が人々に引き起こしたのは不安と恐怖であった。天空における大気の擾乱は、もっと一般的に言って、被創造物の異常——怪物がこれに含まれるのは言うまでもない——はことごとく災厄の予兆となるものでしかなかった。怯える民人は、したがって、天空の様相をじっと窺っていて、どんな不気味な形象にも目敏く気づくのだった。かかる心性を如実に表すのがまたしてもかわら版であろう。16世紀から17世紀にかけてのかわら版は天体現象に関わる驚倒すべき、信じがたいような話を満載しているのである。ジャン＝ピエール・スガンの作成になる1529年から1631年までに出版されたかわら版（総数で五百十七点）のリストによれば⁽⁶⁾、その種のかわら版の出版点数は百点近くあり、その数は怪物譚のかわら版と比べて四倍から五倍にもものぼる。当時の人々の関心のありかをこれほど雄弁に物語るものはない。

2 「おぞましい彗星」(ロンサール)

数ある天体現象のなかでも最も畏怖され、集団的な恐怖心を煽ったのは疑いなく彗星ないし新星の出現であった。1572年にカシオペア座に現れた新星についてはすでに触れたところであるが⁽⁷⁾、逸名のパリ市民は1530年

(6) Voir J.-P. Seguin, *L'information en France avant le périodique*, op. cit.

(7) 拙稿「フランス・ルネサンスの想像界 (III)」, 『中京大学教養論叢』第35巻第3号, 1994, 192頁を参照されたい。以下, これを拙稿 (III) と略す。Cf. A. d'Aubigné, *Histoire universelle*, éd. A. Thierry, t. IV, Genève, Droz, 1987, p. 82. この出来事が当時どのように受け止められ, いかなる議論を引き起こしたかを, ギヨーム・ポステルを中心に考察したセアールの論文はすこぶる示唆に富む。J. Céard, «Postel et l'«étoile nouvelle» de 1572», in *Guillaume Postel, 1581-1981. Actes du Colloque International d'Avranches 5-9 septembre 1981*, Paris, Guy Trédaniel, Ed. de la Maisnie, 1985, pp. 349-360.

にパリ市上空に現れた彗星のことを次のように書きつけている。

1530年。この年の1月20日木曜日、聖セバスチアンの祝日に、夜の九時と十時の間に、パリ市上空に巨大な彗星が現れた。このために空が大きな閃光を放って、ぽっかりと裂けたように思われ、一面火の海になったように思われた。それは、驚くほど大きな尻尾をつけた、とても大きくて長大な、火となって燃えるドラゴンか蛇の形をしていた。それはその日にフランス〔つまりイール＝ド＝フランス〕はサン＝ドニ市の壕に落ちていった⁽⁸⁾。

空を二つに裂かんばかりに現れた、明るく輝く彗星はドラゴンか蛇の形をしていた、とは決して誇張でも捏造でもなかった。疑うべきでないのは、このパリ市民には恐怖の戦慄から彗星がこのように実際に見えたことである。裂けた空から火の雨が降りかかってくるかのように思われ、大きくうねって落ちていくドラゴンの姿にこのパリ市民はアポカリプス的な凶兆があるいは見ているかもしれず、言い知れぬ恐怖を覚えているだろう。

彗星に不吉な徴を読み取ることにかけては、このパリ市民よりももっと明瞭かつ直截にその旨を表明しているのが、メッスの市民フィリップ・ド・ヴィニユールである。1499年のメッスではかつてないほど大量の死者が出た。おとなも子どももばたばたと斃れるなか、7月23日火曜日に市門で警備にあたったフィリップは、夕食後の遅い時刻に市壁の上に上がっていた。

その時刻に、私はドラゴンのように長く、大きい、火と燃える彗星を見たが、それはかなり長い間現れていて、私のように数人の人たちがメッスでも市外でもそれを見た。それは打ちつづく戦役とか、そのときに広まっていた大量死のなにかしらの徴でありえた⁽⁹⁾。

1517年5月にも彗星が現れたとフィリップは『回想録』に記録している⁽¹⁰⁾。同月22日の午後九時と十時の間に、見た目にもはっきりと大きい彗

(8) *Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier, op. cit.*, pp. 403–404.

(9) *Gedenkbuch des Metzzer Bürgers Philippe von Vigneulles, op. cit.*, pp. 135–136.

(10) *Ibid.*, p. 309.

星が夜空に見え、長さは十四ピエか十五ピエあって、宙にたなびく火の旗のようだったという。パーテル・ノステル〔主の祈り〕を五回とアヴェ・マリア〔天使祝詞〕を五回唱えるくらいの間、夜空に姿を見せていたが、やがて姿が小さくなり、ついに消え失せた。しかしこれだけで終わらない。驚くべきことが起きたとフィリップは言葉を継ぐ。彗星出現の同夜に、不慮の火事で近くの村の大部分が焼失するという出来事が起きたのだ。原因不明で、この彗星のせいだと主張したり、そう信じこむ人もいた。火のもととは三年も前から空き家になっている廃屋で、これが村じゅうに広がり、家畜や財産に大きな被害をもたらしたのだった。ここでは他人の意見という形をかりて、フィリップは彗星の出現と原因不明の不審火を結びつけているのだが、不可思議で不気味なことの記号として彗星を見ていたらしいことが知れる。

年代記作者としてジョルジュ・シャトランも彗星の出現を記している。1468年のことというから、ときあたかもノワイヨンを武力でもって制圧したフランス王ルイ十一世とペロンヌに陣を張ったブルゴーニュ公シャルルとの間で一触即発の緊張が高まった時期である。9月22日夜に問題の彗星が現れた。シャトランはまず、自身より先にこれを目撃した人々の話として、彗星が真夜中過ぎの二時か三時、あるいは三時と四時の間に観察されたと記す。ちょうど日が長く、朝が早い時期だったので、四時半を回るともう見えなくなった。この話を聞いて、シャトラン自身も彗星が見たくてたまらず、三時と四時の間に二、三回起きて見ようとしたが、雲がおおっていたり、見る方向が間違えていたのか、なかなか思うようにならない。もう見る努力もしなくなって数日後のある日、日も落ちかかった八時か九時ころに、ふと北西方向に目をやると彗星の姿が目にとまった。こうして三週間ほど、早朝と夕刻に彗星が観察されたのである。この彗星は青白く、そんなに大きいというわけでもなかった。彗星の尾は孔雀が羽を広げたように、末広がりになっていた。東に現れ、ブルゴーニュの上を通過していったのだが、このことからさまざまな解釈がなされた。戦争の準備をしていたシャルル突進公にとって不吉な凶兆を見る人々もいれば、シャルル公への三度目の反乱を企んでいたリエージュ市民にとって敗北の徴を見る人たちもいた。ブルゴーニュ公家歴史編纂官であったシャトランが後者

の解釈に好意的であったことは言うまでもない。実際、翌10月にリエージュはブルゴーニュ軍に略奪された。この彗星はリエージュ市民に影響をもたらしたのであって、それ以外の人々にではないと判断された所以である。彗星に対する集団的な恐怖と不安をシャトランの文面はよく伝えていると言ふべきであろう⁽¹¹⁾。

1618年11月29日と30日にパリ上空に現れた彗星を題材にしたかわら

(11) G. Chastelain, *Œuvres*, éd. Kervyn de Lettenhove, t. V, Genève, Slatkine Reprints, 1971 (1863-1866), pp. 432-434. この彗星の出現は、ルイ十一世とシャルル突進公に関してだけでなく、ヨーロッパの他の君主たちに関しても、どんな前兆を予示しているのかいろいろと取り沙汰されたらしい。Voir J. Robertet, *Œuvres*, éd. M. Zsuppán, Genève, Droz/Paris, Minard, 1970, p. 92, n. 1. なお、ジャン・ド・ヴァヴランが『年代記』で同じ出来事を記した一節が、近藤壽良「奮い立つ獅子と世界蜘蛛——*Le Lion rampant* と一連のバラードをめぐって——」, 『ロンサール研究』VII, 1994, 5頁に引用されてある。

もう一例を挙げよう。1531年8月に出現したハレー彗星もドイツ全土を恐怖の坩堝に陥れた。とりわけメランヒトンは不吉な予兆を感じとって、占星術師で史家のヨハン・カリオンに宛てた手紙のなかで意見を求めている。「一週間以上も前から彗星が姿を見せていますよね。これをあなたはどのように思われますか。それは蟹座の北にあるようです。日没のあとすぐに消えて、日の出のちょっと前に現れるからです。もしも赤い色をしていたら私はもっと怯えたでしょう。それが王侯の死を意味していることは疑いようもないのですが、ただその尾はポーランドの方に向いているようです。なにはともあれあなたの意見をお待ちしています。あなたのご高説を知らせていただければ幸甚です」(A. Warburg, «La divination païenne et antique dans les écrits et les images à l'époque de Luther», in *Essais Florentins*, trad. par S. Muller, présentation par E. Pinto, Paris, Klincksieck, 1990, p. 252. 強調は原文どおり)。1530年のアウグスブルク帝国議会で「ヴォルムスの勅令」の更新と教会改革の禁止が決議され、メランヒトンは窮地に陥っていた。シュマルカルデン同盟が結成され、カール五世との武力衝突をなんとか回避させようと腐心していた頃の、いわば彼の「生涯の危機的な時期」(*ibid.*, p. 253)の手紙であり、平和を維持せんとする気遣いからかかる天文的な迷信に過敏になり、占星術的予言に頼って少しでも力づけを得ようとしたのである。このように、凶兆としての彗星はその時代の様相と結びつけて解釈されることが多かったのである。

版が、彗星の意味をめぐる通説によると彗星は悪疫とか地震とか戦争とか反逆とか殺人とかその他のかかる惨禍の発生源のようなものであり、これを要するに彗星はなんら幸先のよいことの前兆とはならない、と指摘しているけれども⁽¹²⁾、これなどは当時の人々の彗星に対する見方と感情をかなりの的確に代弁かつ要約していると思われる。一方で看過すべきでないのは、彗星に関する記述に、こうした不吉な将来への恐怖感とは別に、予言占星術への不信とその欺瞞性の非難がしばしば絡んでいることである。そのために、驚異をめぐる記述が思わぬ破綻をきたすこともあった。その興味深い例として、ボエスチュオの『驚倒すべき物語』第19章「空に現れて、人々を縮みあがらせた、彗星、ドラゴン、炎といったさまざまな形象の驚倒すべき物語、そこでこれらの原因と理由が明示されること」⁽¹³⁾を考察したい。

前半は、古来天空に現れた不可思議な現象が列挙される。彗星の数々、日中も見える星、輝く三つの太陽、風に煽られて戦闘場面を展開する雲……。これらはいずれも不吉な出来事と結びつけて語られる。かかる天体現象の驚異のなかでも、とりわけ1527年10月11日の彗星出現とその持つ意味に頁が割かれる。それは一時間十五分にわたって観察できたが、血の色をしたおぞましさに人心に戦慄を引き起こし、恐怖のあまり死亡する者や、病をえて臥せる者がでるほどだった。彗星のてっぺんにはいまにも振りおろさんとする大きな剣を握った腕が見られ、その刃の先端には三つの星——そのうちのひとつがひときわ明るく輝いていた——がついていた。彗星の光線の両脇には夥しい斧や刀や血に染まった剣が見られ、それらの間に、髭を生やしたり髪を逆立てた、醜い人間の顔がたくさんあった⁽¹⁴⁾。彗星の出現後しばらくして、ヨーロッパじゅうが人間の血で洗われ

(12) M. Lever, *Canards sanglants*, op. cit., p. 270.

(13) P. Boaistuau, *Histoires prodigieuses*, op. cit., pp. 116–126. この章の初めの文言はほぼそのままアンブロワーズ・パレによって『怪物と驚異について』第37章「天の怪物のこと」の冒頭に援用されている。Voir A. Paré, *Des monstres et prodigieuses*, op. cit., p. 142.

(14) 「1528年10月9日」のこととして、パレはこのボエスチュオの文章をほとんど変更を加えずに再録している。Voir *ibid.*, p. 143.

た。トルコ軍の侵攻、ローマ掠奪……。驚くべき形態を叙述してから、ボエスチュオはこの彗星の意味を説明しようとする。空にときとして見られる、ドラゴンや火や彗星やこうした類のさまざまな形をした奇矯な形象はなにか将来のことを予言・予知しているのである。これを裏付ける意味で、星辰が人間活動に及ぼす影響について古来言われてきたことを列挙するのだが、占星術家たちの解釈を説明する段階でボエスチュオの意図とのずれが露顕してくる。あまり見かけぬ珍しい、それでいて注目に値する事象——神の身近な存在を明示する——を、自然的原因ないし超自然的原因の区別なく羅列して、それぞれを結びつけている無数の関係に神の手の働きを感得することを期していたはずのボエスチュオが、ここに来て小さからぬ綻びを見せるのだ。それが後半である。占星術家でも、片や星辰の特性や力、それらの運行などの「自然的占星術」《l'astrologie naturelle》を学問——古代の天文学——として研究する占星術師がおり、片や惑星の配置などで将来の出来事の吉凶を予知する技術としての「判断的占星術」《l'astrologie judiciaire》、つまり星占いを生業とする占星術師がいる。ボエスチュオが口を極めて貶すのは後者の輩である。占星術への疑念からか、ボエスチュオは一転彗星などの不可思議な異象に何らかの徴・記号を見ることを拒否するのである。「私たちが空に見る彗星やかかる不可思議な形象はなにかを予知するのか、それともごく自然に行われているのか」⁽¹⁵⁾と問いを発するのであるが、ここでアリストテレスの権威を引合いに出してくる。この領野の第一人者アリストテレスが未来の予知についてはなにも言及していないのだから、これらは自然に行われているのだ——「私たちが空に見るこうした奇矯な火やほかの形象が自然に基づくものであることは確かだ」⁽¹⁶⁾——、とボエスチュオは主張して、これらの異象には原因がしかるべくあるのだと書くとき、彼は矛盾に陥っているとしか言いようがないのである。彼にとって、彗星などの異象は将来の出来事を明かす記号のはずだったからだ。それが前半部のテーマでもあったはずである。彗星や月食や血の雨や複数個の月や太陽もすべて原因があって説明が

(15) *Ibid.*, p. 122.

(16) *Ibid.*, p. 123.

つくという。それらは自然に基づくものにほかならないからである。「その原因を知らない人々にそれらは大きな恐れと驚きを引き起こすのだ」⁽¹⁷⁾。「だから、とボエスチュオは続ける、私たちが何度も誑かし欺いてきた判断的占星術師どもの支離滅裂な話とか幻惑とか嘘にかかりきるのをやめて、これからは物事の原因と本質を自然のなかに求めよう」⁽¹⁸⁾。こうして占星術師のいんちきぶりの実例を意地の悪い喜びを交えながら喚起してこの章を締め括る。カルヴァンと同様に⁽¹⁹⁾、ボエスチュオは、ひとの誕生から死までを星の運行と配置から予言することは神の秩序を乱すことにつながるのを知っているのだ。占星術師の欺瞞行為を非難する気持から、彼は論理の破綻を容認せざるをえなかった。驚異は記号でありながら、自然の産物でもあった。しかるにここでは占星術師の瀆神行為をなじるあまり、驚異は自然によって説明がつくものとなり、その記号性を喪失してしまうのである。

ノストラダムスの垂流への不信は、カルヴァンやボエスチュオのみならず、当時広く見られた現象——ということは、とりもなおさず占星術的な素養がそれだけヨーロッパ的な現象として伝播していたことにほかならない⁽²⁰⁾——でもあった。わけても、私たちのレトワルは占星術師に対する根深い疑念を露にしているひとりだった。それを検討するまえに、まずレトワルの彗星に関する記述を見ておこう。とはいいながら、実はレトワルの日記に彗星出現の記事はほとんど見つからないのだけれども。1577年に現れた彗星について、レトワルは「1577年の彗星と母太后の恐怖」と小見出しをつけて記述を残している。しかしこの文面から浮かび上がるのは、小

(17) *Ibid.*, p. 124.

(18) *Ibid.*, p. 125.

(19) J. Calvin, *Advertissement contre l'astrologie judiciaire*, éd. O. Millet, Genève, Droz, 1985 (『カルヴァン小論集』, 波木居齊二編訳, 岩波文庫, 1982, 133-178頁).

(20) 占星術が終末論的苦悶を産み出して集团的信仰心に深い感化を与えていたことの重要性を、ドニ・クルーゼの大著は十全に論じている。Voir D. Crouzet, *Les guerriers de Dieu, op. cit., passim*. Cf. aussi *Divination et controverse religieuse en France au XVI^e siècle*, Paris, Ecole Normale Supérieure de Jeunes Filles, 1987.

見出しが示唆するように、自身神秘学を奨励して卜占に過度なまでの信をおくカトリーヌ・ド・メディシスの迷信深さへの揶揄である。

11月7日木曜日、彗星が南方に姿を現しはじめ、その非常に長い尾を夏の東方へと引いていった。彗星は日が沈んで間もなく、月とともに昇り、夜の九時か十時ころに地平線下に沈んだが、四十日間目撃された。大勢の占星術師は、この彗星が王妃か誰か貴婦人の死を、なにか驚くべき途轍もない禍とあわせて予告していると言っていた。これを耳にするや、母太后はたちまち恐怖にとりつかれ、それが自分のことではないかと心配になった。ある博学の宮廷人がそれを嘲弄して、起こるとすれば母太后が成仏しての万万歳しかありえないとして、次のようなエピグラム〔訳出省略〕を書いたが、これはばらまかれて到るところに流布した (I, p. 221)。

彗星そのものの描写も極度に簡略で、例によりレトワル自身の感想は一言も書き留められぬままの、そっけないものになっている。もっとそっけないのが、1607年9月末の彗星出現の記述であろう。何人かの人たちが彗星を目撃しているが、王妃マリー・ド・メディシスも国王アンリ四世とともにパリにいて、夕食時に別の驚異——ドーフィネ地方に出没する妖精——のことを話題にしていた、とあるだけである (VIII, p. 347)⁽²¹⁾。表面的に

(21) これには1736年版のレトワルの『日記』で初めて発表された異文があって、それになるともう少し詳しく叙述され、占星術師に対する皮肉なまなざしが感得される。しかし急いで言い足しておかなければならないのは、以下に掲げるこの異文がレトワル本人によるものなのかとなると、極めて怪しいと言わざるをえないことである。それでもここに掲げるに値はするだろう。「今月末、数日にわたって驚倒すべき彗星が現れた。一年前に、しかも同じ月に、火箭や火の槍や火の穂として飛び交って戦っていた火と大きな光を見たことのある人たちは、それが同一の彗星であって、ただ高度が高くて遠く離れていたのでもそのように気づかれなかったのだと主張している。しかしその日から彗星は地上に接近し、こうしてもっとよく見えるようになった。なにはともあれ、この彗星は数日来姿を見せていて、たいそう長くて大きい尾を持っていて、その尾は太陽とは反対側から広がっている。学者や占星術師はこの機会をとらえて、さまざまな考えや占いや妄想を開陳したり、ある者たちはなにか大きな幸福を、別の者たちはなにか大きな災禍を予測することだろう」(VIII, pp. 367-368)。彗星が出現するとなにかにつけその前兆が詮索される点では、いずれの場合でも判を押したように同じであった。ただここで注目したいのは占星術師たちの

は無関心を装っているかにみえるが、翌 1608 年 10 月 27 日、これが小論となってベルンで印刷されると、好奇心の強いレトワルは喜んでこれを貰い受けるのだった (IX, p. 149)。しかしいくら好奇心の強いレトワルとはいえ、すべてを無批判的に受け容れるような人物でないことは怪物を論じた際に指摘したところでもある。

そもそも、占星術に限らず、この類の占いにレトワルは極めて懐疑的な言辞を吐いている。その枚挙にいとまがないけれども、そのうちのいくつかを『日記』から拾い出してみよう。1603 年 5 月 27 日にひとりの狂人が投獄された。来る 6 月 3 日以降の火曜日に、天から降る火や不可思議な病と突然の死でパリが破滅するに違いない、と断言して憚らなかったからだ。「この新手の占星術師」«ce nouveau astrologue» は精神錯乱をおこしたととられたのだった (VIII, pp. 78-79)。占星術師すなわち狂人という結びつけ方に、やはりレトワルの意地悪なまなざしを認めるべきなのだ。王妃マリー・ド・メディシスが 1606 年 2 月 10 日に女兒を分娩した際にも、占星術師たちの予言がはずれたことを指摘して、「(……) 占星術師たちの学問とやらは裏をかかれたことになる。連中は王妃が男児を分娩し、そのときには生命の危険に瀕するだろうと予言していたからだ(……)」(VIII, p. 209) と書きつけている。あるいは予言どおりに事が運ばなかったことに神の配慮を見るのである。「今年 1607 年は、3 月からはパリを脱けださなければならないと言っていたあの気違いの占星術師どもの予言や医者たちの共通した意見に反して、冬らしい寒さや氷結するような厳寒がまったくなかったために、他の年以上にベストが少なかった。神は人間の思惑を超えたところでその力を、そして連中の悪意を超えたところでその善意をお示しくださるものなのだ」(IX, p. 38)。所詮予言なんてばかばかしいものなのだ。1608 年にローマ教皇が斃れるだろうと予言した占星術師は投獄されてしまう。他人に死の予言をすることは愚かで不敬なことだ。おかげで教皇どころか、本人が死の危機に瀕しているではないか (IX, p. 44)。1608 年は元日から冷え込みが凄まじく、各地で奇妙な事件が

「妄想」«leurs chimères» という文言である。この異文の記述者のト占観を示唆しているように思われる。

起こったものの、聖パウロの祝日（1月25日）になって霧がたちこめて寒さも緩んできた。占星術師の予言では、この聖パウロの祝日に寒さが猛烈に強まり（それどころかこの日に寒さは緩んだのだが）、前代見聞の、耐えられぬほどの寒さになって、民人の半分の凍死するのではないかと案じられた。ところが現実には予言と正反対だったというわけだ。この学問のいかさま、空しさたるや、かくのごとし（IX, pp. 42-43）。したがってイタリアの高名な占星術師コナに会う機会があっても、「この手の学問をまったくのいかさま、欺瞞と見なしている」ので、大いに好奇心はあったけれども、結局会見を断っている（IX, p. 230）。占星術だけに不信を抱いているわけではない。暦の類の占いにも懐疑的である。「ひとからル・グラン・モワソヌール〈大収穫人〉と呼ばれていた男によって書かれ、リヨンで印刷された今年用の暦がこのころパリの評判を呼び、これを買いたいと思わぬような者はひとりとしていなかった。というのも、驚くべきことを言っているからで、教皇の死とサヴォワ公の子息の死を予言しており、しかもそれらの死は同時に起こると予言していたからである。そのためにサヴォワ公は彼をトリノで投獄してしまった。噂では縛り首になってしまう所存とのこと。それにしてもなんともへっぽこな学問だ、その学問をしている主を下らぬことや冗談事のために逮捕させて、おまけに縛り首にまでさせるとは」（VIII, p. 185）。このように、占星術を始めとするト占の予兆性と信憑性に疑問を抱くレトワルは、怪物を前にしたときと同様、迷信を排する合理的思考という規矩をここでも根底に据えているように思われるのである。

予言占星術の欺瞞を弾劾したカルヴァンですら、「神が世の記憶に値するなにかの審判を行なうためにその手を差しのべることを欲するとき、神は我々にしばしば彗星によって予告するであろうことを私は否定するものでない」⁽²²⁾と書いて、彗星の予兆性を肯定せざるをえなかった。ロンサーも「おぞましい彗星」が1562年のフランスの不幸をすでに予言していたと謳った⁽²³⁾。一方で、レトワルは合理的な判断からそれに疑いを抱きはじ

⁽²²⁾ Calvin, *op. cit.*, p. 90（前掲訳書、168頁）。

⁽²³⁾ Ronsard, *Discours a la Royne par P. de Ronsard*, in id., *Discours des misères de ce temps*, *op. cit.*, p. 67.

めた。おそらくここにも確実に新しい心性の到来の徴を指摘することができかもしれないが、それにしても彗星の出現をめぐる議論にはなにかしら曖昧さがつきまとう。彗星を純粹に天体学から説明しようとする科学性が芽生えてくるにしても、その予兆性まではなかなか完全に排斥できないようなのだ。事はそんなに簡単に進展しなかったと言えるのではあるまいか⁽²⁴⁾。後代のフィクションであるとはいえ、ダニエル・デフォーがさまざまな文献史料を渉猟したうえで著したとされる『ペスト年代記』(1722)の一節があるいはその辺りの事情を私たちに示唆してくれているかもしれない。

『ペスト年代記』はペストという災難をただ叙述したものではなく、これを機会にして直ちにふりおろされる神の手を感じ得するという、宗教的な経験を描いたものである。語り手の H. F. ——馬具商を営んでいるとの設定——にとって、ペストはまさに神の怒りの徴であり、懲罰であった。これは多くのペスト論で繰り返し説かれた、古典的聖書的な伝統（オウィディウス、ヒポクラテス、ガレノス、『民数記』、『申命記』、『サムエル記下』、『列王記下』、『デカメロン』）に属する常套句で、17・18世紀になってもこの伝統は衰退しなかったという⁽²⁵⁾。H. F. からすれば、ペストはキリスト教的・神学的な文脈から説明されるべきものだったのである（「神の復讐の使者」*«a Messenger of [God's] Vengeance»*⁽²⁶⁾）。「まったく明らかに、

(24) ジャン・セアールもその点でひとつのヒントを与えてくれる。「注意しておきたいことは、〔17世紀〕以後怪物と驚異は別々の道をたどることになるということである。さまざまな前兆と見なされつづけるあらゆる種類の驚異がひとの関心をなおも引き寄せるにしても、怪物のほうはそうでなくなったのである」(J. Céard, *op. cit.*, p. 456)。つまるところ、前章にて示したように怪物の関心は急速に失われていくのに対して、彗星の場合は同じ放物線をたどらなかったということである。

(25) Louis A. Sanda, «[Religion, Science, and Medicine in *A Journal of the Plague Year*]», in D. Defoe, *A Journal of the Plague Year*, ed. P. R. Backscheider, New York/London, W. W. Norton & Company, 1992 (A Norton critical edition), pp. 274–275.

(26) Defoe, *op. cit.*, p. 152 (デフォー『ペスト』, 平井正穂訳, 中公文庫, 1973, 311頁).

デフォーは『ペスト年代記』が神の怒りの説を反映するのを望んだのだった⁽²⁷⁾。しかし神の怒りの説は啓蒙の世紀の合理精神と相容れないものだった。デフォーも時代の子である。同時代の医師たちの意見に与しながら、ペストを神罰と見るだけでなく、自然の災厄とも見なす、相反する見方を示しているのである。彼は自然の秩序が神の干渉で壊されるのを望んではいなかった。神は自然の因果関係をとおしてその力を発現するのだ。この、伝統的な見解と同時代の精神風土との間でせめぎあう動揺ぶりを、次の文章はよく伝えている。

(……) このたびの災厄の原因を神の手が直接加えられたものとし、摂理の働きがそこにあったとする考え方を非難する者ではない。非難するどころか、実際にたくさんの人が疫病^{ペスト}にかからないですみ、またかかっても助かったという驚くべき事実のうちには、不可思議な摂理が明らかに働いていたと思っている。私自身が助かったこともほとんど奇蹟的だと思っている。深い感謝の念をもって記しておくゆえんである。

しかし、なんらかの自然的な原因から生じた病気としての疫病ということを考える場合には、それが自然の経路を通して伝播していった、その現実の姿において考えてゆかなければならない。しかしまた、それが人間的作為による因果関係のもとにあったとしても、そのために神の裁きでないとするわけにはゆかない。神は自然の全体系を作り、その運行をつかさどって給うのである。したがってまた、吉凶いずれにしろ、対人間的なその行動が自然的な因果関係の経路を普通にたどることを妥当と見給うのである。神はありふれた自然的な因果関係によって働くことを好み給うというわけである⁽²⁸⁾。

「これがデフォーの声である」⁽²⁹⁾とするならば、デフォーはこれとまったく同じ心的傾向を彗星についても私たちに見せているのである。すなわち、彗星は不吉な前兆にして神の裁きの徴とする見方と、しかしながら彗星は自然現象のひとつにすぎないとする合理的見解との間の揺れ、である。

1665年のロンドンにはペストの猖獗を極めた。それ以前に、恐怖をいやがうえにも掻きたてるような、いろいろな奇怪な出来事が次々と起こったら

⁽²⁷⁾ L. A. Sanda, art. cit., p. 277.

⁽²⁸⁾ Defoe, *op. cit.*, pp. 152-153 (前掲訳書, 311-312頁).

⁽²⁹⁾ L. A. Sanda, art. cit., p. 278.

しい。そのひとつに、数ヵ月にわたって光り輝いた彗星の出現があった。「これは、その翌々年、ちょうどあの〔ロンドンの〕大火のあるちょっと前にやはり同じような彗星が現れたのとじつによく似ていた」⁽³⁰⁾。「いろいろな妖術者や巫女^{みこ}みたいな連中」が「これについて後になって（といっても、この二つの天罰が過ぎ去ってしまってから話だが）、いろいろ話をしてきた」⁽³¹⁾。つまりいろいろな前兆を言い立てていたのである。曰く、

悪疫の前の彗星は淡い、鈍い、どんよりした光彩を放っていて、その飛び方も荘重な、ゆっくりしたものであった。ところが、大火の前の彗星は燃えるように光り輝いていたし（中には炎をあげて燃えていたというものもある）、その速さもすさまじいものであった。したがって、一つは、鈍重ではあるが痛烈とも凄絶ともいえるような、つまりこんどの疫病にはっきり現われたような天罰の前兆であり、他は、突如として起こり一瞬にしていっさいのものを焼き尽くす——それこそまさしく大火のような一大痛撃の前兆であった（……）⁽³²⁾。

この「観察録、つまり思い出の記録」《Observations or Memorials》⁽³³⁾を綴るロンドンの一市民 H. F. もこれら二つの彗星を目撃して、不覚にもそうした「俗説に捉われていた」ひとりであった。「彗星を見た時、これはまさしく神の下し給う審判の前兆であり、警告である、とつい思ってしまった」⁽³⁴⁾のである。そう、17世紀になっても一般的に彗星は相変わらず不吉な前兆となるものだったのである。「しかし、とデフォアの創作になる馬具

⁽³⁰⁾ Defoe, *op. cit.*, p. 20 (前掲訳書, 35頁)。

⁽³¹⁾ *Ibid.*, pp. 20, 21 (同上)。括弧内の挿入句の皮肉な調子にも注意すべきであろう。「つねに、星のこれこれの影響がどうの、これこれの惑星の会合がどうの、と言って、これじゃいやが応でも病気、疾患が起こらざるをえない、したがってまた疫病の起こるのも理の然らしむるところでござろう、と言っていた」(*ibid.*, p. 27 (同上, 50頁)) 占星術師たちが信じやすいロンドン市民に恐怖と狼狽をいたずらに招いたことを非難して、H. F. は彼らの予言を信用するのを拒否している。

⁽³²⁾ *Ibid.*, p. 21 (同上)。

⁽³³⁾ 『ペスト年代記』の原文タイトルは、*A Journal of the Plague Year: Being Observations or Memorials, Of the most Remarkable Occurrences, As well publick as private, Which happened in London In 1665* である。

⁽³⁴⁾ Defoe, *op. cit.*, p. 21 (同上, 36頁)。

商は続ける、私はその半面、他の人々と同じように、この事態にとほうもない解釈を加えることはできなかった。これらは自然現象として、その原因が天文学者によって当然説明されるはずだ、彗星の運動や運行も計算されている……少なくとも計算することが可能とみなされているはずだ、と
思っていたからである。したがって、この彗星は必ずしも疫病^{ペスト}、戦争、火事その他の凶災の前兆もしくは前駆とは考えることはできない、と私は考えたのであった」⁽³⁵⁾。この合理的な思考が馬具商に体现される当時の人々のそれなのか、それとも作者デフォーのものなのかは措くとしても、レトワルのような姿勢をとる一部良識派も存在していたことを暗示はするであろう。にもかかわらず、ロンドンの一般大衆の心をとらえていたのは、やはり、「ロンドンに、なんだかよくわからないが、とにかく恐るべき異変が起こる、恐るべき神の審判が下される、といった暗澹たる恐怖感」⁽³⁶⁾だったのである。なんと16世紀の人々の心性に近いことか。デフォーはつづけて、予言、星占い、夢占いの類の謬見に惑わされる市民の姿を容赦なく暴いていく……。このように、彗星などの驚異に対する恐怖、前兆と見なす傾向はたぶん17世紀にも命脈を保っていたのである。

フィクションをかかえる文脈のなかに据えたことで非難されるだろうか。しかし、優れた近代史研究者ミシェル・ペロネでさえもが16・17世紀におけるペストを論ずる際に他の史料とともにデフォーを援用するのである⁽³⁷⁾。『ペスト年代記』は本質的に想像力の産物であっても、歴史の雰囲気を与えた「大部な史実群の練り直し」⁽³⁸⁾である点で、単なる小説とは一線

(35) *Ibid* (同上)。そういえば、王立協会会員だったサミュエル・ピープスもペスト流行より以前に彗星のことを話題にして、彼自身それを目撃しているが、前兆だの恐怖だのとは一言も日記に書き留めていない。『サミュエル・ピープスの日記』、臼田昭訳、第五巻(1664年)、国文社、1989、426、431、434-435頁、および第六巻(1665年)、1990、72頁をそれぞれ参照。

(36) *Ibid* (同上)。

(37) M. Péronnet, «La peste, signe de la colère de Dieu», in *Les signes de Dieu aux XVI^e et XVII^e siècles*, présentés par G. Demerson et B. Dompnier, Clermont-Ferrand, Faculté des Lettres et Sciences humaines de l'Université Blaise-Pascal, 1993, p. 264.

(38) L. A. Sanda, art. cit., p. 285.

が画されるべきなのだ。よし、これがまったきフィクションであろうとも、そこに16世紀人の心との驚くほどの符合を見ることができる。デフォーがこのドキュメンタリー・タッチの作品を書く半世紀前に、ロンドンでペストは流行したのだ。彼がこれを執筆するときにも、ペストの惨事はロンドン市民にまだ生々しい記憶として生きていたに違いない。デフォーが市民の体験談なり文献なりを収集しながらこの作品を構築していったのであれば、そこに、反映された17世紀当時の何らかの心性を垣間見ることも許されるかもしれない。あるいはデフォー自身の、つまり18世紀人の感性を認めることもできるだろう。それは、私たちの主題と重なる部分の多い、卓越した『ペスト年代記』概論を著したルイス・A・サンダが認めるところでもあった、「デフォーが史書に頼っているかぎり、彼は1665年と1721年にあらゆる階層の人々が持っていた強烈な信念と感情を反映している(……)」⁽³⁹⁾、と。

それにしてもやはりこれは単なるフィクションではないかと異議が唱えられるのであれば、もうひとつ興味ある事例を提示しよう。フランス最初の定期刊行物として知られる『メルキュール・フランセ』(1611-1648)の第五巻は、1617年から1619年までの年毎の主要な消息を収集しているのだが、1618年に観測された有名な彗星出現——かわら版がいちはやくこれを話題にして、例によって前兆をあげつらっていたことはすでに少しく触れた——についてもここに報じられている。「ヨーロッパ西部および北部の国々で見られた彗星とその形象」⁽⁴⁰⁾の小見出しで、スペイン、フランス、ドイツ、イングランドで目撃された彗星の形状をまず説明してから、この記事の筆者(たぶん印刷者兼発行者のジャン・リシェ/エチエンヌ・リシェ⁽⁴¹⁾)はイエズス会士ジャン・レヴルション師に依拠しながら専ら筆を進

(39) *Ibid.*, p. 274. 『ペスト年代記』を考察するうえで、サンダの研究は極めて有益だった。

(40) *Voir Cinquiesme tome du Mercure François*, Paris, Estienne Richer, 1619, M. DC. XVIII., p. 290. 引用はすべてこの版本によるが、本稿掉尾の「補遺」にその原文を掲載したので、頁数の参看指示を一々するのは避けた。

(41) *Voir H. Hauser, Les sources de l'histoire de France, XVI^e siècle (1494-1610)*, t. IV, Nendeln/Liechtenstein, Kraus Reprint, 1967 (1915), p.

める。このポン＝タ＝ムソン大学の数学者もこのときの彗星出現を機に『彗星論』(1618)をラテン語で著していたからで、これはすぐ後にフランス語訳がエピナルで刊行されたらしい⁽⁴²⁾。記事の筆者はレヴルション師の説を紹介しながら、イエズス会士の結びの言葉を引用して記事を終えているので、記事そのものはほとんどレヴルション師に割かれていると言っても過言でない。ここに引用されたレヴルション師の結句が、当時の人々の、とりわけ知識人の陥っている彗星に対するジレンマを焙り出しているのである。そこではまず、「彗星は騒擾や戦争や国家の転変、あるいは誰か権勢者の死の確かな前兆」と断定する判断的占星術師が問題とされる。占星術師は自分たちの予言の根拠を示すために、王侯たちの脆弱な体質は彗星の悪い影響を受けやすく、彗星が乾燥しているせいで胆汁の分泌が増えて、その結果すぐに揉め事を起こし、戦争で町を掠奪したり、国家を転覆させたりする、という理由を挙げる。これをレヴルション師は揶揄するのだ、「まことしやかなお題目だ。にもかかわらず、これが何人かの人たちからは議論の余地なきものと受け取られているのだ。経験がこうした予言の徒なことをしばしば教えていたのに」。経験上、彗星が現れたって王侯がひとりとして死なないこと、彗星を見なくたって何人もの王侯が死んでいることを知っているからだ。王侯は虚弱な体質で傷つきやすいというけれど、もっと虚弱でいながら死なない人々もいるわけだし、第一、王侯のほうが他の人たちより身を護る術がたくさんあるはずだ。占星術師の言うとおりに、彗星が社会不安と騒擾の原因となるのだったら、医者がさしづめ最高の政治家になっただろう。医者なら大黄を服用させて王侯の過剰な胆汁を浄化することで、残虐な戦争の不幸を回避できるし、平和をもたらすこと

50; L. Lalanne, *Dictionnaire historique de la France*, Paris, Hachette, 1872, p. 1047, s. v. Journaux. ピエール・ベールも『田舎の人の質問への答』第一巻、第四十六章で『メルキュール・フランセ』について有益な情報を提供している。『ピエール・ベール著作集』第七巻、『後期論文集Ⅰ』、野沢協訳、法政大学出版局、1992、187-190頁参照。

(42) Voir P. Choné, *Emblèmes et pensée symbolique en Lorraine (1525-1633)*, Paris, Klincksieck, 1991, p. 402, n. 5 et pp. 465-468. レヴルション師は1591年頃に生まれ、1670年1月17日に歿(L. Lalanne, *op. cit.*, p. 1131, s. v. Leurechon)。

ができるだろう、と占星術の欺瞞性を剔出していく。こうして彗星の予兆性は皮肉たっぷりに否定されるのであるが、大学教授レヴルション師はここに到って動揺を見せる。純粹に科学的な現象に神の怒りの顕現をやはり見ないではいけないのだ。だからといって神はこの彗星を前兆として利用されていないとか、神の偉大さを人間に賛嘆させたり、神の権能の威力を示して人間を怯えさせるために、天に驚異を現させることをなさらないと言うつもりはない、と続けるからである。神は神の子を懲らしめる意図からというよりも、畏怖させ、なすべきことをするようにさせる意図から、慈父のごとく笞を天に吊るしていらっしゃるのだ、と結ぶとき、私たちは16世紀の時代の心性と来るべき時代の心性との交錯を目のあたりにする想いがするのである。換言すれば、かかるほどに彗星の驚異は大勢としては変わりなく受け止められた、と言うべきではあるまいか。少なくとも劇的な変化などというものはなかったし、安直な進化論的観点を導入して事足りりとすべきでもないことだけは確かである。

大まかな見通しだけと言うなら、彗星の予兆説がほぼ決定的に否定されるにはおそらくピエール・ベールを俟たねばならないだろう。精力的に彗星前兆説を論破しようと試みたベールの時代になっても、「彗星は世界を無数の荒廃で脅かすという俗説」がなおびこっていた。ベールは次のように嘆かずにはいられなかったからである。

ですから、私にはわからないのです。この彗星の回帰が正確に予言されたという一事で、これは自然の通常の法則に従う物体であり、どんな規則にも従わぬ神異などではないことを確信してしかるべきあなたのような大博士までが、どうして時流に押し流され、選ばれた少数者の言うことには耳も藉さず、世間一般と調子を合わせて、彗星は神から遣わされた軍使のようなもので人類に宣戦布告をしに来たのだなどと想像されるのでしょうか⁽⁴³⁾。

かような彗星を凶兆とする、旧態依然たる迷信が根強いなかで、彗星前兆説を非とする八つの理由——なかでも「彗星の個別の予言の基礎となる占星術は、世にも笑うべきもの」であるとして、完膚なきまでに否定される

(43) 『ピエール・ベール著作集』第一巻、『彗星雑考』、野沢協訳、法政大学出版局、1978、20頁。

——をあげて、迷信や奇蹟を打破しようとしたベールの『彗星雑考』(1682)の発表は、つとにポール・アザールが指摘したごとく、フォントネルの『神託史』(1686)やベッケルの『魔法の世界』(1691)とともに超自然への攻撃を拡大・深化させ、18世紀の宗教批判を準備するものであった⁽⁴⁴⁾。それは言うまでもなく超自然・驚異の後退に連動せずにはおかないのだが、しかしそれは本論の議論から大きく逸脱した、稿を改めて説かれるべき主題であろう。

3 幻の出現

自然の正道からはずれたものに敏感な人々は、彗星のほかにも、さまざまな異常を中空に見出した。前述のボエスチュオ『驚倒すべき物語』第19章はこんな出だしになっていた、「天の表層は、髭を生やした彗星、長髪をなびかせた彗星、松明、炎、[火の]柱、槍、楯、ドラゴン、月や太陽の重複化、その他これに類したもののどもで、幾度となくその様相を変えられてきた」⁽⁴⁵⁾。同章では、ほかに昼日中に見える無数の星、風に煽られて戦闘を繰り返す二十の群雲、血の雨などが言及されている。かかる超自然的な現象もやはり「飢餓、ペスト、戦争、王国の盛衰、人類に起こるそれらに類した災厄の指標であり、先駆け」⁽⁴⁶⁾であると解されたのであろう、不安の記述が散見されるからには。たとえばギヨーム・パラダンは1572年8月

(44) P. Hazard, *La crise de la conscience européenne 1680-1715*, Paris, Le Livre de Poche, 1994, p. 149sq. (ポール・アザール『ヨーロッパ精神の危機』, 野沢協訳, 法政大学出版局, 1973, 191頁以下)。

(45) P. Boaistuau, *op. cit.*, p. 116.

(46) *Ibid.*, p. 121. もっとも超自然的現象は全部が全部凶兆だったわけでは勿論ない。マレルブがペーレスクに宛てた書簡で知らせている不可思議な現象などはさしづめ瑞兆に当たるだろう。それによれば、1607年のある夜、「鳥の形をした火らしきもの」が国王の居城の上空を通過して、主塔の時計を轟音をたててぶち破った。その大音響にもかかわらず誰も目を覚ますことがなかった。この話を聞いたアンリ四世は、戦闘の前にしばしば似たようなことを目撃しており、その都度好結果に終わっているから、これは勝利の徴だ、と大喜びして言った、というものだ (Malherbe, *Œuvres*, éd. A. Adam, Paris, Gallimard, Bibl. de la Pléiade, 1971, pp. 378-379)。

2日の日記に、「午後六時に、まるで竈から出ている火のような徴が空に見えた」⁽⁴⁷⁾、となんの註釈も施さずに、ただ事実だけを短く記しているが、彼によれば翌1573年は神の怒りの懲罰が下された («Ira Dei super nos») 年だったのだから⁽⁴⁸⁾、竈からめらめらと伸びる火の舌を空に見て、神の警告らしきものを少なくとも不安の念を持って読み取っていたらしく見えるのだ。勿論個人の想像力の次元の話だけではない。集団の次元においても同様のことが言える。16世紀初頭および17世紀初頭の事例から三つ引いてみよう。ひとつは、フランソワ一世治下の逸名のパリ市民が日記に書き留めているのだが、1517年(現行暦の1518年)1月に、ローマとその界限で、その数およそ六、七千の兵士たちが交戦するのが空といわず地上といわず森といわず響きわたったという怪異である。長砲や火砲の轟音、甲冑の打ち合う音が一時間以上にもわたって聞こえたものの、それは音響だけで、姿形はなにも見えなかった。これだけでも民を畏怖せしめるに十分な驚異譚なのに、日記作者はさらにこれに連関させてもうひとつの異常事を記録し、そこになにかしらの意味を見つけずにはおかない。この「幻聴」のあとで、同じ数だけの豚が互いに格闘したというのだ。すっかり怯えた民人は、これらの豚どもは「悪のエンブレム」⁽⁴⁹⁾たる異教のマホメット教徒(すなわちトルコ軍)を表徴していると信じこんだのだった⁽⁵⁰⁾。二つめ

(47) *Le Journal de Guillaume Paradin ou la Vie en Beaujolais au temps de la Renaissance (vers 1510-1589)*, Genève, Droz, 1986, p. 44. ドニ・クルーゼによれば、パラダンが因果関係こそ明示していないが、しかしそれと分かる形で、この天の徴が差し迫った脅威を予感させたかのごとく、パラダンは所有していた「金と絹でできた小さな聖遺物袋」(*ibid.*, p. 43)を部屋の長持に隠したと記している、という(D. Crouzet, *La nuit de la Saint-Barthélemy. Un rêve perdu de la Renaissance*, Paris, Fayard, 1994, p. 511)。だが筆者の使用する版本では、件の聖遺物袋隠匿の記述は天の徴の記述よりも先に見えるところから、必ずしもクルーゼの言うほどに二件の記述の因果関係は明瞭でないように思われる。

(48) *Ibid.*, pp. 64-65.

(49) O. Niccoli, *op. cit.*, p. 87. この幻の伝播についてニッコリは興味ある議論を展開している(*ibid.*, pp. 61-88)。

(50) *Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François premier, op. cit.*, p. 62.

の例は、1608年に目撃された異象である。後年に『メルキュール・フランセ』の形に結晶するはずの、1608年末に印行された年報に載せられているものだ。「いろいろなところで怪物や驚異が話題になっている」⁽⁵¹⁾と切り出して、17世紀になってもこれらへの関心が相変わらず強いことを仄めかしてから、アングレームで目撃された驚くべき幻影について語られる。白昼のよく晴れたときに、小さな厚い雲が夥しく地上に下りてきて、その数一万二千ほどの兵士の形を取った。彼らは青い甲冑に身を固め、青と赤とで半々に染められた軍旗が半ば翻るもとで隊列を組んでいた。風采の上がった大柄の隊長が軍隊の先頭に立ち、十歩ほど先を歩いていた。隊列は秩序正しく田野を行進していった。この幻は目撃した人々にはなはだしい恐怖を植えつけ、何人かの農民はこの「幻覚による軍隊」«*ceste armée imaginaire*»⁽⁵²⁾を本物の兵隊だと信じこんで恐れおののき、金目のものを持って家から逃げ出すほどだった。貴族たちはこの驚異の正体を見破らんと大勢が集結し、彼らの足跡を辿っていったところ、彼らは雑木林に近づくと隊列を乱さぬために林の上にふわりと浮き上がり、爪先が木々の葉に触れるだけで、また地上に下りて、ある森まで進軍するのに気づいた。そして隊列はその森で忽然と姿を消し、二度と現れなかった。「超自然的な驚異であり、正真正銘の戦争の記号であって、どんなによく見える感覚もそこで

51) *Histoire de l'année 1608*, in *Archives curieuses de l'histoire de France depuis Louis XI jusqu'à Louis XVIII*, par M. L. Cimber et F. Danjou, 1^{ère} série, t. 14, Paris, Beauvais, membre de l'Institut historique, 1837, p. 399. これは同年に出回ったかわら版を下敷きにしているものの、多少異なったテキストになっている。Cf. M. Lever, *op. cit.*, pp. 291-294. なお、16・17世紀が夥しい驚異に富んだ時期であること、したがって全般的には軽信が主調であったこと、とはいえこうした驚異になかには懐疑的な人々も存在したことを証明しようとしたビュッソンは、このアングレームの幻影を初め、17世紀に記録された「大気の驚異」や空中に出現した「戦慄すべき幻」、さらにはさまざまな前兆と奇蹟の存在をいくつも列挙している。Voir H. Busson, *La pensée religieuse française de Charron à Pascal*, Paris, Vrin, 1933, pp. 310-316. この大著を披見できたのは高橋薫氏（駒沢大学）のご好意による。記して感謝する。

52) *Ibid.*, p. 400.

は盲目になってしまい、人間のどんなに巧緻な分別が自然学の道理と準則に照らそうといささかも分からないような驚異である」⁽⁵³⁾ と結ぶ。無知ゆえに農民が怯える「幻覚による軍隊」という表現からも察せられるように、この著者（前出のジャン・リシェか）はやみくもに騒ぐのではない。ただ幻影であることは分かっている、人間の知識や理性を越えた驚異であると感嘆を隠さないだけなのだ。ここで興味深いのは私たちのレトワルもこの不思議な異象に言及していることである。彼はこれをサントンジュ地方——アングーモア地方に接する——で起こったとしているが、たぶん同一の出来事を謂っているのだろう。1608年11月29日に、スイス兵やドイツ兵やドイツ傭兵やフランス兵などで構成された軍隊のことが国王に報告された。その軍隊はサントンジュ地方に陣を張り、戦に行軍するのが目撃された。ところが人が近づくとそれは消えてしまい、かと思うとすぐにまた姿を現した、というものである。レトワルはこの摩訶不思議を簡略に記してから意見を付している。「これは古代の歴史家、とりわけティトゥス・リウィウスなんかに読まれる「怪異」《*ostenta*》である。もしも神が手を下しておられず、かつまた私たちに憐れみをかけてくださっているのなら、これらはすべて戦争と近々あるはずの禍の前兆である」(IX, p. 173)。驚異譚を好んで記録した古典古代に通じたレトワル、『メルキュール』の記事と同様に予兆説に与するレトワルの姿——予兆性を前にしてのレトワルの動揺、曖昧さ、矛盾——がこの一文から浮かび上がるだろう。メッスの人フィリップ・ド・ヴィニユールが確かな情報として『回想録』に記述を残しているのが、三つめの例である。1500年の末に、ドイツのライン河周辺で、人々がたいそう不可解な新病で倒れた。空から黄や赤の十字架が降ってきたからで、その十字架に触れるやたちまちのうちに人々は斃れていった。十字架が服の上に落ちると、すぐに服を貫いて肉体にまで達した。この知らせを受けて、メッスでは聖体行列をするように命令が下され、毎日曜日にキリストの十字架像の前ではめ歌われたのだった⁽⁵⁴⁾。ドイツからの

⁽⁵³⁾ *Ibid.*

⁽⁵⁴⁾ *Gedenkbuch des Metzzer Bürgers Philippe von Vigneulles, op. cit., p. 138.* フィリップ・ド・ヴィニユールが伝えるのはドイツからの情報であるが、

知らせに仰天して、戦々恐々たるメッス市民があわてふためいて聖体行列に参加する様を伝えているのである。

十字架の雨ならぬ、血の雨が降ったとの記述はもっとたびたび目にすることができよう。たとえば年代記作者モリネは、1481年2月13日にディジョンで雨まじりの血が降ったこと、そのため家々の瓦や日干しの洗濯物に血の染みが残ってしまい、それで時のフランス王ルイ十一世にそれらを見ていただいたことを、驚嘆の念をもって記録している⁽⁵⁵⁾。レトワル自身、ただの一度だけ簡潔に記している。

アンジューでの血の雨——〔1584年〕10月半ばころに、アンジューはボン・ド・セで血が雨となって降った。当然のことだけれど、大部分の無知な民人はそれを驚くべきことと見なしていた (II, p. 172)。

また、ドービニェは伝聞・噂の形を借りて——こうすることでこの種の驚異に懐疑的であることを最大限に示唆しようとしているのだろう——、オランダで熱い血の雨が降ったことに触れている。「厚さ一ピエの氷を貫いてしまうほど熱い血の雨が降るという驚異があったそうだ」⁽⁵⁶⁾。レトワルは「無知な民人」«peuple ignorant» なら喫驚してもやむをえないかと突き放したような口吻でさらりとあしらうことで、ドービニェは噂の付け足し («on dit aussi») として短い一文を書き加えることで、いずれも血の雨に懐疑的な態度を示唆しているのである。ボエスチュオなどは、血の雨

事実1500年前後は多くの地域で十字架の雨が観察されたらしく、とりわけドイツとオランダでこの種の風聞は宗教的な昂揚をもって広められた。強烈な終末論的時代感情に裏打ちされて、銅版画「ランゼルの奇妙な豚」や1512年のシャム双生児のデッサンなどの畸形の図とか、木版画連作「黙示録」を制作した画家デューラーも十字架が降るのを目撃したひとりであった。Cf. J. Białostocki, *L'Art du XV^e siècle des Parler à Dürer*, traduit par P.-E. Dauzat, Paris, Le Livre de Poche, 1993, p. 430.

⁽⁵⁵⁾ Cité par N. Dupire, dans son édition des *Faictz et Dictz* de J. Molinet, t. III, Paris, SATF, 1939, p. 1006. これについては『驚異の出来事集』にも言及されてある。Voir *ibid.*, t. I, p. 314, vv. 713-720.

⁽⁵⁶⁾ A. d'Aubigné, *Histoire universelle*, éd. A. Thierry, t. VII, Genève, Droz, 1993, p. 229.

の自然的原因を知らないから、民人はすっかり怖じ気づいてしまうのだと述べて、その原因をわざわざ説明しようとする。だが彼がレトワルやドービニェと決定的に異なるのは、血の雨の降ること自体にはいささかの疑念も抱いていないことであろう。1555年にフリブール界隈で降った血の雨に触れて、彼は言う。

〔血の雨は〕滴となって落ちた服や樹木を赤色で染みをつけたが、それは驚くべきことのように思えるけれども、それでも自然に基づくことなのだ。というのは、大地がいろいろな物体に多様な色彩を与えているのと同様に、雨水にも色をつけているからであり、また大地が赤みがかっていれば赤い蒸気を発散することになり、その蒸気が雨に変わると、天は上に立ち昇ってきたと同じ赤に着色されたままにまた降雨させるからである。それで服に落ちると、赤色で服を染めて、染みをつくってしまうことも可能になるのである⁽⁵⁷⁾。

いやはやなんとも幼稚な原因説だ、と私たち現代人が嗤うのは傲慢というものだろう。それは四百年以上も経たからこそ言えることであり、レトワル言うところの「無知な民人」にとっては鼻で嗤うどころか、血の雨は正真正銘の驚異だったのである。

空に不思議な火が現れることもあった。前述のパラダンのほかに、レトワルも何度か日記に書きつけている——やはり相変わらず簡潔にはあるが。

〔1581年〕8月26日土曜日、午後九時ころ、パリ市（ペストが相変わらず続いていた）上空の夜空に、東方から西方に伸びた巨大な発火が現れて、まるまる二時間くらい大きな光を放っていた（II, p. 19）。

これなどは暗黙裡に、巨大な火の出現とパリに猖獗していたペストとの関連を認めたものになっているかもしれない。あるいは、

〔1582年〕10月30日日曜日、午後五時ころ、南方の空に、雷の稲妻のように輝き放つ、大きくて恐ろしげな光が出現して、たっぷり二時間は続いた。人々はこれを何かの凶兆だと解釈した（II, p. 87）。

⁽⁵⁷⁾ P. Boaistuau, *op. cit.*, pp. 124–125.

怪物や彗星と同じように、不思議な光は不吉な前兆として恐れられたのである。その恐怖がさらに嵩じると、1583年9月のときのように、善男善女が集団で悔悛の行列をなしてパリのノートル＝ダム大聖堂に祈禱に殺到し、神の加護と怒りの慰撫を敬虔に祈るという事態に立ち到ることになる⁽⁵⁸⁾。この大掛かりな悔悛と苦行の行列の発端になったのも、「空中に現れるいくつかの火や他の徴、つまり天と地に見られる驚異」であった(II, p. 134)。空に輝く火が奇怪な形を象ることもあった。1605年11月17日木曜日、午後六時と七時の間に、パリ上空に「赤い筈を象った奇妙な徴」«un signe estrange du ciel, en forme de verges rouges» が現れて、数千人の人がそれを目撃した(VIII, p. 194) というのもそうしたひとつだが、「パリ市上空に見えた漂う火」という小見出しのある、1575年の記事はもっと突飛なものに私たちには映るかもしれない。

聖ミシェルの祝日前日の9月28日水曜日、夜の九時から十時ころのこと、パリ市とその近郊の上空に、宙に漂ういくつかの火が大きな光となり煙を出し、槍や武装した人間を象るのが見られた。国王の宮廷とパリ市はこのことに仰天して、誰もがそこにパリが蒙ることになるはずの禍の不吉な前兆を見た(I, p. 90)。

赤い筈の形をしているだけならともかく、槍や武人の形をした火と煙とは。けれども驚くのは早い。パルマ・カイエはもっとびっくりするような空のスペクタクルに私たちを誘うのだから。しかも、あまたある驚異のうちでもこれほど身の毛のよだつものは当代にも過去にもなかった、とパルマ・カイエ自ら——より正確には、後述するかわら版の逸名作者——が保証するくらいなのである。彼の報告する1601年8月11日と12日の両日にわたってハンガリーで出現した驚異のいろいろを、一部省略ながらも、長くなるのを厭わずここに引用しよう。

(58) クロード・アトンの記すところによれば、罪の意識が深まり、神の怒りに胸が締めつけられる想いが嵩じると、苦悶でパニック状態となったカトリック教徒は悔悛の行列をつくって、あちこちの教会に赴いては神の慈悲を祈願する行為にでた。Voir D. Crouzet, *op. cit.*, t. 1, pp. 212-214.

この日大気は晴朗で澄み切っていたのに、十一時から十二時ころにかけてどんよりとかき曇り、すぐに呻き声と唸り声が大気中に聞こえ出して、それらの音と反響が西方へと、ときには北方へと向かっていったように思われた。民人はそれに驚嘆・喫驚してほとんど我を忘れんばかりになって、ある者は往来に出て、ある者は窓辺で、かくも大いなる不可思議千万な驚異の結末を見ようとした。午後二時にみんなをぞっとさせていた恐ろしい呻き声が止みはじめて、大気も元のようにやや澄んできて穏やかになってきた。と、そのとき、右側の西方へと、左側の東方へと広がった、途轍もなく大きい十字架が見えてきた。ほかには何も見えず、ただその十字架の端に、まるで太陽の光のように輝く、白くて透き通るような肉体があることと、十字架の中央に茨の冠が留められ、右側に鞭があるのが見えた。足下には中背で、神々しい顔立ちをして、両手を合わせたままの男の姿が現れたが、その十字架の前で打ちひしがれ謙虚になって、赦しと憐れみを乞うているように見えた。このために人々はみな畏れと敬虔の両方の気持に心動かされて、往来でひれ伏し、己らの犯した過ちに憐れみをかけてくださるよう祈願した。(……) その結果〔あたりに〕見られるものときたら、涙と呻きと熱心な祈りと悔悟と痛悔と、その他に贖罪の奥儀を観想しながらのキリスト教的な敬神の美德だけであった。誰もがこの神聖な十字架を見てひれ伏し、謙虚になっていたが、何らかの嵐か不幸が近づいているのを恐れつつも、みんなが法悦に浸っていたのだ。件の十字架の周りに輝く光の幅は往き来する人たちの明かりと灯火の役目をしていて、昼がずっと続くように思われた。翌日の明け方に、大きな稲妻とともに恐ろしい雷鳴があり、この神聖な十字架を呼び戻し、受け入れ、取り戻すために、天がぱっくり口を開けたように見えた。十字架が消えると、たちまち大気は全体血の色に染まったままになった。まるで見張りに立っているかのようにつぎに何が起こるか固唾を呑んで待ち受けていた人々の心に、それは前よりもひととき大きな恐怖を引き起こした。視線を天に上げると、大気は再びどんよりとかき曇り、新たに途方もない驚異、すなわち二匹の動物が出現した。そのうちの一頭は豹に似て、いくつかの斑点がついていたし、もう一匹はバシリスク〔睨んだり、息を吹きかけるだけで人を殺す怪蛇〕に似て、毒でいっぱい、とぐろを巻いた尾を持っていた。この二匹の動物はまったく恐ろしい姿を見せ、相争っている闘いで互いに敵意を燃やしていた。その間にも大気の唸り声と騒音が相変わらず続いて、目撃者たちの恐怖と戦きをいやましに増大させた。彼らはみんなこぞってこうした前兆の結末を待ち設けていたいと願っていたのだ。こうした幻出現の噂はすでに到るところに広まっていたので、無数の人々がそのうえわめき立てていた〔後述するはずのかわら版の異文では「さらに押しかけてきた」とあり、このほうが理解しやすい〕。

これを機会に近隣の地からたくさんの人たちが駆けつけてきて、ありえないと思っていたことを大きな賛嘆と驚きでもって目撃していた。なにせこの動物どもは八時から正午まで闘っていたから。夜の闇と同じくらい深い闇のために見極めにくかったけれども、ついには豹がバシリスクを制圧し、打ち破ったようだった。それで蛇ないしバシリスクが西方に、豹が東方に取って返した。一方は日出づる東に、他方は日沈む西に配置されるという、これらの動物の特性ゆえに、深い想いに満ちた驚きであった。長い格闘の末、これらの動物は大気にけたたましい音をたてて消え去り、前日に聞こえた呻き声が再び激しさを増し、二時間続いたように思われた。しかもそれは、黒ずんだ雲が大気中でぐるぐる渦を巻いたり、矢のように飛来する激しい動きを相変わらず伴ってのことであった。その後は、民人の大変な喜びと歓喜のうちに、空も晴朗に戻り、大気もいつもの静穏に戻るようにみえた(……)。この年8月11日と12日に目撃者たちを大いに震え上がらせ驚嘆させた、摩訶不思議な驚異とは以上のとおりだった⁽⁵⁹⁾。

この真に「驚倒すべき」物語はパルマ・カイエの『七年記』(1605)から引用した一節である。それにしても、1598年から1604年までの年代記のなかにパルマ・カイエはなぜこのような驚異譚を挿入したのだろうか。しかもこれだけに留まらず、ほかにも多くの驚異をちりばめているのである。すでに指摘したように、ティトゥス・リウィウスらのローマ史家以来の伝統に則ったこともあろう。だがなによりも、パルマ・カイエは年代記の単調になりがちな文体に変化を付与するという美学的配慮を働かせているようだ。「話が多様なことは心地よいものだ。だから亡霊の話を見てみよう(……)」*«la diversité des discours est agreable; voyons donc discours d'un spectre (...)»*⁽⁶⁰⁾と述べて、1599年という時代の様相の叙述——正しくは当該の年の物故者リスト——から一転、フォンテーヌブローの森を徘徊する大男の話を始めているからだ。したがって上に引用した驚異譚にしても、話柄の多様性を重んじるパルマ・カイエの美学的配慮の現れと見ればよいのだろう。しかしそこで注意しなければならないのは、挿入されたこの長い驚異譚が実はパルマ・カイエ自らの筆になるものではな

(59) Palma Cayet, *Chronologie septenaire*, éd. cit., pp. 347–348.

(60) *Ibid.*, p. 228.

い、ということである。つまり他人の書いたものをそのまま借用・引用しているのである⁽⁶¹⁾。その行為自体は16世紀ではさほど珍しいことでないにしても、パルマ・カイエがちゃんと借用してきたのは、当時流布したかわら版であった。1602年にパリで刊行された『ハンガリーはサン・ジョルジュ市の上空に新たに現れた驚異についての記憶さるべき話(……)』である⁽⁶²⁾。二箇所大きな削除——とはいっても、借用した部分と比べれば量的にはごくわずかなものでしかない——があることを除いて、パルマ・カイエはほぼそのまま全文を引用しているのである。その削除箇所はいずれも教化的な意図が露骨な部分であると指摘できる。ひとつはかわら版の末尾で、神がこうした驚異をとおして善行を心掛ける気持ちを人間に植えつけさせておくようにと祈願する箇所であり、もうひとつは空に現れた十字架に惨禍の予感を覚えながら民がひれ伏すというちょうど半ばあたりで、「神は私たちを深い眠りから目覚めさせるために、また、肉の泥水のなかに横たわっていてはならず神の受難を瞑想しなければならないことを警告するために、さまざまな徴や前兆をとおして私たちの許を訪てくださる」⁽⁶³⁾のであり、悔悛と悔悟を私たち人間に搔きたてるために、神は怒りを爆発させるに先立って、戦争とかペストとか飢饉といったような禍や咎を行使するのだ、と説く箇所である。いかにもかわら版の本領発揮といった教化的・教訓的部分はものの見事に捨象されていることになる。パルマ・カイエはかわら版のセンセーショナルな面が嗜好にあったのかもしれない。教化的な箇所をすっぱりと欠落させて、ひたすら三面記事的な話の筋のおもしろさを追求しているようにみえるからである。

ところでかわら版といえば、驚異の領野で迷信的な部分をいつまでもひきずった、最も民衆的なレヴェルで近代初期の心性を反映したものであり、レトワルらはすでにこの手の愚昧な迷信に愛想をつかして見限っていたはずのものだったけれども、パルマ・カイエはかわら版をなお活用して

(61) オゼールによれば、パルマ・カイエは各種の書類、書簡、演説、声明を一部ないしそっくり再録していて、さしづめ彼の著書はつぎはぎの本になっているという。Voir H. Hauser, *op. cit.*, t. IV, p. 48.

(62) Voir J.-P. Seguin, *op. cit.*, p. 98, N° 248.

(63) M. Lever, *op. cit.*, p. 259.

いたと言うべきかもしれない。『七年記』の続篇にあたる『九年記』(1608)でも、パルマ・カイエは天の異象を列挙するのをやめない。「この年〔1593年〕ドイツではいくつもの驚倒すべきことが空に見られ、そのため民人はたいそう驚嘆し、擾乱と変動の危惧を引き起こした。何人かの人々はハンガリーでのトルコ軍との戦争のせいでこういうことが起こったに違いないと思っていた」⁽⁶⁴⁾、という書き出しで、簡略ながらさまざまな驚異を並べるのである。7月のこと、ドイツ南西部のヘッセンでは、三日間続けて太陽が暗くなって、その周りに環ができた——金環日食の類だろうか。11月の宵には、空に血の色をした炎が出現、と思いきや突然環状のものになって天を駆けめぐり、二時間続いてからついに消滅して、満天の、澄んだ星空に戻った。10月にはプラハやウィーンなどの都市で、空のあちらこちらに血の色をした箇所が見られ、忽然とそれは剣の形となり、さらには槍、兵士たちの形状をとり、ついには戦闘を繰り広げて、呻きやぞっとするような叫びをあげた。空からたくさんの炎が降ってきたりもした⁽⁶⁵⁾、という具合である。例によって、パルマ・カイエは収集した各種資料をもとにしてかかる驚異現象を列挙したのであろうが、それらの信憑性については疑念を毫も差しはさんでいないかにみえる。

ボローニャの博物学者ウリッセ・アルドロヴァンディが『怪物誌』においてなおこうした天体畸形学を論じていたのは、パルマ・カイエからさらに三十余年経った1642年のことであった……⁽⁶⁶⁾。

最後にもうひとつここで想起してよいのは、異象の驚異が時局を解釈する口実として絵画に描写されることすらあったということだ。アントワヌ・カロンの作に帰せられている「日食を観察する天文学者たち」(ロンドン、個人蔵)である。不気味に赤い空に日食の太陽が浮かび、それを囲むように黒い雲が渦巻いており、幾筋かの稲光が走っている光景がまず圧倒的な異様さでもって見る者に迫ってくる。後景では、何人かの人たちが恐怖のあまり逃げまどったり、空を指差しておののいたりしている。前景で

⁽⁶⁴⁾ Palma Cayet, *Chronologie novenaire*, éd. cit., p. 588.

⁽⁶⁵⁾ *Ibid.*, pp. 588–589.

⁽⁶⁶⁾ バルトルシャイティス『鏡』、谷川渥訳、国書刊行会、1994、75頁参照。

は三人ないし四人の天文学者——プラトン、アリストテレス、ゾロアスターをモデルにしたとする説、ノストラダムス、ジョルダノー・ブルーノ、ポンチュス・ド・チャールのモデル説などがある——がこの異象について議論を戦わせていて、そのうちのひとりの腕をとって恐れおののく人々は異象の説明を求めようとしている。階段に座るプットーの両脇には占い棒と定規が置かれてある。ではこのように見る者に恐怖感を掻きたてずにおかない絵はいつの時代の異象を暗示しているのか。カロン研究の第一人者だったジャン・エールマンによれば、16世紀フランスで皆既日食が見られたのは1544年と1598年、部分日食はおおよそ五年毎だったが、いずれの年を充てるにも適当でなく、しかも赤々と燃える空は血の雨——実際は黄砂ならぬ赤い砂の嵐 («des tempêtes de sable rouge») だった、とエールマンは言う⁽⁶⁷⁾——を思わせるらしい。画面の建築物からして1570年頃、もっと言えば血の雨を伴った空に怯える人々の様子からパリ市民を極度の興奮状態に置いた1571年の——ということは聖バルテルミーの虐殺の一年足らず前——「ガスチーヌの十字架」事件あたりを暗示していて、したがって1572年初めにこの絵は創作された、とエールマンは結論づける⁽⁶⁸⁾。だから異象の凶兆をとおして、「カロンは政治的・宗教的騒擾の危険を喚起し、その不吉な結果を明らかにしようとした」⁽⁶⁹⁾のである。驚異の天体現象を隠れ蓑にしてカロンが解釈してみせた騒然たる現状の政治的・宗教

⁽⁶⁷⁾ J. Ehrmann, *Antoine Caron. Peintre des fêtes et des massacres*, Paris, Flammarion, 1986, p. 111.

⁽⁶⁸⁾ *Ibid.*, pp. 111–112. Cf. aussi le catalogue de l'exposition *L'Ecole de Fontainebleau* (Paris, Grand Palais, 1972–1973), Paris, Editions des Musées Nationaux, 1972, N° 33. ユグノーに対するカトリックの激昂を際立たせた「ガスチーヌの十字架」事件については, cf. par ex., D. Crouzet, *op. cit.*, t. 2, pp. 83–88; B. B. Diefendorf, *Beneath the Cross. Catholics and Huguenots in Sixteenth-Century Paris*, New York/Oxford, Oxford U. P., 1991, pp. 84–88; L. Mouton, *La vie municipale au XVI^e siècle. Claude Marcel, prévôt des marchands 1520–1590*, Paris, Perrin, 1930, pp. 95–120; P. Champion, *Paris au temps des Guerres de Religion*, Paris, Calmann-Lévy, 1958, pp. 158–171.

⁽⁶⁹⁾ *Ibid.*, p. 112.

的局面とはこのようなものだった。

画家カロンを引いたついでに、今まで述べてきた天のさまざまな徴の造形化について一言付せば、たとえばボエスチュオの『驚倒すべき物語』に載せられた挿絵に類したものが 17 世紀は勿論、18 世紀にまで継承されていることだ。1638 年にロンドンで印刷されたあるかわら版には、天空に現れた事象を図像でもってリスト化したものが挿絵として入れられているが、それを見ると、彗星やら戦闘場面を繰り広げる軍隊やら大砲・剣・槍の類やら馬上の二人の一騎打ちやら二頭立ての馬車、さらには無頭人^{アケバロイ}といった怪物やシャム双生児のような畸形が描かれているのである⁽⁷⁰⁾。また、1716 年 3 月 18 日に空に見られた徴を知らせるドイツの版画によれば、相も変わらず、燃える剣や軍馬を駆って討ち合う戦闘シーン、流星、燃える大梁などが図像化されているという具合である⁽⁷¹⁾。

ことほどさように、ヨーロッパの近代人の想像力は驚異に憑かれており、驚異は脈々と想像力のなかに生きながらえていたのである。

(70) Voir K. Park and L. J. Daston, art. cit., p. 31 (Figure 4).

(71) ジャン＝ピエール・ヴェルデ『天文不思議集』、荒俣宏監修、創元社、1992、20 頁参照。

補 遺

本稿にて言及した『メルキュール・フランセ』の彗星の記事は、不可思議を科学的・客観的に見ようとする精神状態の萌芽を示唆している一方で、旧来の予兆性・神の怒りの徴を見ることに相変わらずとらわれている心的傾向をも示唆するという動揺を垣間見せて極めて興味深いものであった。しかるに『メルキュール・フランセ』は刊行された17世紀前葉以来復刻の対象になっておらず、記事を参照するのが、フランス本国でならいざ知らず、我が国では決して容易でない。スガンによれば、この記事もまたある一枚刷りのかわら版をもとにして書かれているようだが (J.-P. Seguin, *L'information en France avant le périodique*, op. cit., N° 252), それにもかかわらず記事の重要性に鑑みて、このことは遺憾の極みというべきであろう。幸い、筆者は高橋薫氏 (駒沢大学) のご好意によって原文を読む機会を得たものであるが、上の理由からこの記事全文ここに転載して、資料としていつでも検証できるようにしておくのも意義あることと思料した。参照の便を計っていただいた高橋氏には心から感謝の意を表する次第である。原文を尊重して句読点の変更は一切加えていないが、ただ綴字法上、現代の慣習に従って、v と u, i と j は弁別した。したがって «comete» «comette» などの綴字の不統一もそのままに残した。また略号は文字表示にして、& は et に、母音字+波形符は母音字+n/m に改めた。

底本としたのは, CINQVIESME TOME /DV/ MERCVRE/ FRANCOIS,/ OV,/ Suitte de l'Histoire de nostre temps,/ sous le regne du Tres-Chrestien/ Roy de France & de Nauarre,/ LOVYS XIII./ Contenant ce qui s'est passé de memorable ez anne'es/ M. DC. XVII./ M. DC. XVIII./ ET/ M. DC. XIX./ Iusques à la Declaration de la volonté du Roy sur le/ depart de la Royne sa Mere du Chasteau de/ Blois. Publiée le 20. Iuin 1619./ A PARIS,/ Chez ESTIENNE RICHER, au Palais, sur le Perron Royal./ M DC. XIX./ Auec Priuilege du Roy. [M. DC. XVIII., pp. 290-292] である。

* * *

〔欄外の小見出し〕 *De la Comette et de sa figure aux pays Occidentaux et Septentrionaux de l'Europe.*

〔p. 290〕 La Comette qui avoit paru en cimenterre le 15. Novembre à Constantinople, se vit en Espagne, France, Allemagne et Anglettere, avoir la teste ronde en apparence, rougeastre à guise d'un charbon rond enveloppé de fumee, la queüe longue plus blanche, et s'alongissant en forme de gerbe, ou comme une poignée d'osier, paroissant par une fallace de la veuë, comme si elle eust esté couchee de son long sur la connexité de l'air ou du ciel, et par fois semblant un peu courbee, tantost s'appetissant au bout, ores se dilatant, et quelques fois apparoissant en forme de queuë de renard. Elle se voyoit au quartier Oriental, entre le Septen- 〔p. 291〕 trion et l'Orient: sur ses derniers jours elle parut le soir au quartier Occidental entre l'Occident et le Septentrion.

Le Pere Levrechon Jesuite en fait un discours qu'il dedia au Duc de Lorraine, où il note les remarques qu'elle a eu avec les principales parties du ciel, la matiere de laquelle s'engendrent les cometes, la figure, couleur, mouvement et durée de ceste-cy, qui peut avoir esté soixante jours, terme ordinaire de la durée des cometes: sa distance et esloignement de la terre; et selon sa distance, qu'elle pouvoit estre sa solidité, la longueur de sa queuë, la largeur, et son mouvement journalier, et de ses effects et presages: puis finit en ces mots,

Je n'ay plus à parler qu'à ces Astrologues judiciaires, diseurs de bonnes et mauvaises adventures, qui assurent que les cometes sont presages certains de troubles, guerres, changements d'Estats, ou de mort de quelques grands: Et pour donner couleur à leurs Propheties, apportent pour raison, que la trempe et complexion naturelle des Princes, comme plus tendre et delicate, est plus

susceptible des influences malignes des cometes, la seicheresse des-
quelles, subtilise ou augmente leur humeur bilieuse, si qu'ils en-
trent aysément en querelles et prennent des resolutions de guerre,
qui ravagent les villes et Provinces, et bouleversent les Estats et
Empires; Voylà de beaux comptes, qui neantmoins sont reçeus de
plusieurs pour articles de foy, jaçoit que l'experience ait mon- [p.
292] stré souvent la vanité de ces Propheties: car plusieurs co-
mettes paroissent, sans qu'aucun Prince meure: et plusieurs Prin-
ces meurent, sans que l'on ait veu aucun comette; joint que la
delicatesse de leur complexion, n'est pas plustost offensée par
l'intemperie de l'air, que celle des autres hommes, par ce qu'il y en
a de plus delicats qu'eux, qui n'en meurent point, que parce qu'ils
ont plus de moyen de se garantir que les autres.

Que si ce qu'ils disent de la cause des troubles et remüemens
publics estoit vray, les Medecins seroient les plus grands hommes
d'Estat et les plus sages Politiques du monde, par ce qu'ils pour-
roient par une dose de Rheubarbe, purgeant l'excez de la bile des
Princes, destourner tous les malheurs d'une cruelle guerre, et
mettre la paix par tout.

Je ne veux pas dire pourtant que Dieu par sa secrette disposition
ne se puisse par fois servir des comettes comme d'un prognostic, et
qu'il ne monstre par fois des prodiges au Ciel, tant pour attirer les
hommes à l'admiration de sa grandeur, que pour les intimider par
la demonstration de sa puissance. Il pend les verges là haut comme
un bon pere qui les met dessus le buffet à la veuë de ses enfans,
non tant à dessein de les chastier, que de les faire craindre et
contenir en leur devoir.